

## 第一中学校区学校運営協議会 第2回会議

上半期を振り返って、学校の現状と抱える課題について、委員による熟議を展開

第一中学校区学校運営協議会の第2回目が、先日10月12日(木)に第一中学校ランチルームにて開催されました。

10月に入り、各学校では二学期もスタートして、秋の様々な学校行事や子どもたちがかわる地域のイベントも目白押しです。

そうした中で、一年間の折り返しの時期を迎えたこともあり、第一中学校区の学校の現状と学校運営上の課題について具体的に各校から説明と協力依頼等が丁寧に報告されました。

冒頭の開会にあたり、岩本学校運営協議会長からは、学校運営協議会の役割についての確認がありました。

○学校・家庭・地域で子どもを育てていくことを念頭に置き、学校が抱える課題について共有し、よりよい学校運営をともに作り上げていく観点から、委員でしっかり協議してほしい。  
○また、本会は、イベントを催すことのみが目的ではなく、学校が抱える課題を少しでも改善していくことについて協議したり、支援のあり方等について協議したりすることが本会のねらいである。

**第一中学校** 森田校長より

■学校に委員のみなさんをはじめ、地域の方に来校いただく機会が少ないように感じ

ている。まずは、学校の子どもたちや学校への関心をもってもらい、足を運んでいただきたい。

■本年度、生徒は全体的には落ち着いて学習に向かっている一方、不登校または、不登校の傾向のみられる生徒をはじめ、授業に入れず困っている生徒がみられる。こうした生徒への学習保障等、学校の教職員の人的な対応が難しい状況がある。

■教職員の時間外勤務時間数も多い。部活動の対応にあたり、部活動指導員が配置されることで、教職員の休日勤務の時間の削減が図られているが、依然として時間外の勤務時間数は多い。

■また、学校の施設・管理の面で、運動場の芝の管理や草刈り等、教職員、特に管理職の負担が大きい。本来、学校運営や教職員の育成・指導という役割を担っているが、かなりの時間を割かざるを得ない状況がある。

■学力面では、全国学力学習状況調査結果の全国平均を下回っているものもある。また、生徒の地域活動へのボランティア参加の割合も低い状況がみられるなど、今後の課題でもある。

**上道小学校** 中村校長より

◆地域の方々と子どもたちとのつながりやかかわりが多くみられるようになっている。

学習の中で地域に出かけて学習する機会も多くみられるが、子どもたちの地域とがつながる「あいさつ」は低調である。

◆学習への集中ができていて割合は高い一方、学力につながる指導のあり方の工夫が学校として課題だと受けとめている。

◆学校になじめず不登校になっている子ども複数みられる。その中で、やすらぎルームに通っている子どもあれば、家庭で過ごしている子どももある。こうした子どもたちの居場所を考える必要がある。

#### 境 小学校 高濱教頭より

▼本校でも、不登校児童が複数みられている。やすらぎルームに通っている子どもあれば、家庭で過ごしている児童もある。タブレット等を活用しながら、教室の雰囲気を感じることができるようにしている。例えば、朝の会での活用。または、別室から教室の学習に参加する形態をとって、教室とのつながりを作ろうとしている例等。

▼教職員の働き方改革については、夜の会合があった場合などについては、勤務時間の振替等で対応している。また、現在、給食時間の準備や片付け等、担任以外の教職員が担任に代わって対応するなどの工夫も行っている。

さらに、教科担任制の導入により、より分かりやすい学習になるよう工夫し、子どもたちを担任以外の教職員もかかわれるような体制づくりや工夫も行っている。

▼地域とのつながりをもっと作っていくために、地域の方に積極的に学習にかかわってもらえるような工夫(地域の人とのGG大会)を検討している。

小中学校より、現状・課題についての説明を受けた後で、以下の4本の柱について

- ① 「不登校等にかかわる課題」
- ② 「学力向上にかかわる課題」
- ③ 「学校の施設設備管理にかかわる課題」
- ④ 「教職員の働き方改革にかかわる課題」

課題の共有を含め、それぞれの課題について、どんな取組を工夫できるのか、小グループで話し合いをしました。

4つの課題をすべて協議するには時間もあまりなかったため、柱を一つだけ決めて、協議を行ったところもありました。

【あるグループでの協議内容】より

○不登校等にかかわる課題は、いずれの小学校・中学校でも学校・家庭・当事者である子どもたちを含めて、大きな課題であり、当然、学校だけで対応できない大きな問題だ。○人間関係が原因であるのか、学習面での課題がひきがねになっているのか、家庭環境の問題が根底にあるのか、複雑に絡み合った要因など、原因を探し出そうとしても難しい。

○実際、不登校の傾向や不登校になっている子どもたちも含め、学校に通うことができなくても心の耐性があり、何とか学校に来ている場合もある。

○当事者である不登校の子どもたちもさることながら、子どもたちを抱える家庭のストレスははるかに大きなものがある。

○子どもたちが安心して過ごせる場づくりや保護者が安心して相談できる場づくり、そして、保護者同士のつながりの場が必要になるのではないか。

※これといって、すぐにでもできそうな取組はありませんが、みんなでできる取組を形にしていきたいものです。